

明恵『摧邪輪』の引用経論に関する小考（一）

中御門 敬 教

【抄録】

明恵（高弁・一一七三―一二三二（承安三―寛喜四））による『摧邪輪』の引用経論に関する研究を行う。具体的には、以下の二点に留意し、『摧邪輪』本文理解に資する形の資料提供を、目的とする。

① インド起源の経論を対象として、当該箇所の子ンスクリット語原典、チベット語訳、漢訳の出所を示し、必要に応じて現代語への翻訳を行う。

② 当該箇所の先行研究について近年の訳註研究をも含めて、知見の及ぶ限り言及する。

こうした諸点を加味して、原拠文脈からはこう読むべきであり、原拠からこういう意図で引用された、という指摘を出すことが、筆者の最終的な課題である。本稿はその一端であり、その開始である。

キーワード…明恵『摧邪輪』、法然、迦葉経、迦葉品、

唐法蔵撰『梵網経菩薩戒本疏』

明恵『摧邪輪』の引用経論に関する小考（一）（中御門敬教）

はじめに

周知の如く、明恵（高弁・一一七三―一二三二（承安三―寛喜四））による『摧邪輪』には、彼の広範な知識をもって多数の教証が列挙される。中にはインドに起源をもつ、日本仏教においては馴染みの薄い仏典すら登場する。一例を挙げれば卷中冒頭には、蓮華戒菩薩造、宋施護訳『広釈菩提心論』（『大正蔵』三二、No. 一六六四）カマラシーラ著 *Bhūvanakrama*、修習次第）が引用され、二種菩提心（誓願菩提心、発趣菩提心）について議論される如くである（Cf. 「菩提心に二種有り。一は願心。二は分位心」）。

一般的に述べて、教証に沿って論を展開する「論、註疏、章疏」の研究においては引用の原拠にまで遡り、それと向かい合う姿勢が必要とされる。この部分を疎かにしては良心的な研究と言い得ないであろう。この求めに應えるものとして『摧邪輪』の場合には、田中久夫校注「摧邪輪卷上」（『鎌倉舊仏教』（日本思想体系）十五）、岩波書店、

一九七二）、末木文美士『『摧邪輪』巻中・下引用出典注記』（『仏教文化』十四・七、一九八四）がある。各々の考察範囲は、田中校注が「巻上」、末木論文が「巻中下」を扱っている。平成二十八年（二〇一六）現在、田中校注から四十六年、末木論文から三十三年の歳月が経過するが、依然として両氏の研究成果は色褪せず、『摧邪輪』研究における基本書の位置を譲らない。ただしこの間に、学界における仏教研究の成果は、目を見張るほど蓄積されつつある。『摧邪輪』研究においても、それらの成果の利用や照合が求められている。それが『摧邪輪』研究に関する現時点の課題の一つであろう。

本論文では、明恵自身が属する華嚴宗の根本經典の一つである、「入法界品」の研究進捗状況について紹介しよう。ちなみに末木論文 *ibid.* 四頁上段は、重要な教証であるこの「入法界品」を例に挙げて、明恵の引用傾向を以下のように論評している。

「概して高弁の引用は原経論に忠実であり、諸本が相違する場合、高麗藏本より他本に一致する場合が多い。また、『華嚴経』引用の場合、『六十華嚴』より『八十華嚴』『四十華嚴』によることが多く、特に「入法界品」を重視していることなどが注目される。」

「入法界品」の現代語訳や抄訳は幾つかあるが、サンスクリット語原典からの日本語全訳としては、梶山雄一監修『華嚴経入法界品』さとりへの遍歴（上・下）』（中央公論社、一九九四）が出版され、この「入法界品」に対応する唐般若訳『大方広仏華嚴経（四十華嚴）』

（『大正藏』十、No. 二九三）についても、大角修『現代語訳華嚴経「入法界品」 善財童子の旅』（春秋社、二〇一四）が出版された。さらには、堀伸一郎氏による、中央アジアで発見された梵文をもとにした「入法界品」の原典研究も進行しつつある（Cf. Shinichiro Hori “Gaṇḍavyūha-Fragments der Turfan-Sammlung”）（『国際仏教学大学院大学研究紀要』五、二〇〇二）。こうした状況を鑑みて、本稿においては田中氏と末木氏による優れた調査結果を利用しつつ、改めて引用経論についてサンスクリット語原典、チベット語訳、漢訳をも利用し考察を行いたい。

考察にあたって

一つの教証について、当座、以下の順序で整理を行うものとする。

- （一）見出し（「私解」を出し、引用の意図をも概説する）
- （二）本文（田中校注の訓読を使用）
- （三）現代語訳（佐藤抄訳を使用）
- （四）田中、末木校注記載の注（ただし本稿では田中校注に関するもの）
- （五）教証の原拠と現代語訳（サンスクリット語原典、チベット語訳、漢訳の順）
- （六）他典籍における同引用
- （七）補説（他の関連領域への言及）

【迦葉經に出てたり】

(一) 見出し

「雑行の咎」に関する唐法藏撰『梵網經菩薩戒本疏』からの引用（私解…法藏は「雑行」（雑行の咎）について「福行」と「余行」を挙げる。そのうちの「福行」とは世俗的な幸福の追求行為である。「余行」とは「福行」の範疇に入らない行為、特に一法に固執し、それ以外を排除する立場を指す（「性、慧悟にあらずして、随つて一法を学して即便ち封著す」）。この「迦葉經」の引用は前者「福行」に関する教証である。ちなみに直後で、「称名の行」は「余行」に分類され、「仏法を毒害する過あるべし」などと、厳しく批判されていく。）

(二) 本文

○鎌田茂雄、田中久夫校注『鎌倉旧仏教』（「日本思想大系」十五、岩波書店、四六頁～四七頁、一九七二）

「香象大師の梵網經の疏に三学および雑行に約して、おのおの經論の文を引いてその咎を出して大賊の名を立つ。しかるに戒定慧の三学は、おのおの別相あり。第四に雑行の過を出して云く、「四に雑行とは、また二種あり。一に福行に約せば、謂く、性、質直にあらずして、苟しくも奸計して共に奇福を崇む。世人を眩躍して重観を招引す。意は少を以て多を呼ぶに在り。これを用つて活命す。既にその所求を遂げて、即ちこれを持んで慢を爾り、名聞もまた然り。これは是れ仏法を売る賊。迦葉經に出でたり。」¹二は余行に約せば、謂く、性、慧悟にあらずして、随つて一法を学して即便ち封著す。この所学を眩して、以

て名利を招いて、余の所修は皆究竟にあらずと撥す。これはまた愚人、仏法を毒害する賊なり。」文。

(三) 現代語訳

○佐藤成順訳『摧邪輪（抄）』（「日本の名著」五、中央公論社、三八九頁～三九〇頁、一九七八）

「香象大師は、『梵網經』の注釈書のなかで、戒律と精神統一と智慧の三学、およびさまざまな行為（雑行）とについて、それぞれ別個に經典や論書の文章を引用してその咎を指摘して「大賊」という名をつけている。だから、戒律と精神統一と智慧の三学には、おのおの別個の様相があることになる。その注釈書のなかで、第四のさまざまな行為（雑行）の過失を出すところにつきのように述べている。

四に、さまざまな行為を実践する者に、また二つの種類がある。一に、幸福をもたらす行為を実践する者。これについて考えると、性質が質直でなく、いやしくも悪だくみをして、珍奇な幸福をたつとび、世のなかの人の目をくらまし、たくさんのあつい施しを招きよせる。その意図は、小さなことで大きなことをもたらそうとするのである。たくさんの施しものによって生命あらしめている。すでに自分の欲求を成しとげ、このたくさんの施しものをたのみに慢心をおこし、他の人で、財利をむさぼり私腹を肥やしていない者を軽蔑し、ことごとくそうした人をいやしくも悪くいう。財利をむさぼり己れを肥やすことに關してそのとおりであるからには、名声を望むことに關しても同様である。このような人間は、

仏法を売る賊である。この説は『迦葉經』に出てくる。二に、幸福をもたらす行為以外の行為へ余行を實踐する者。これについて考えると、性質が利発でなく、一の教えを学んでそれに執着してしまい、その学んだ教えに目がくらんで、しかも名声を招き、ほかの修業はみな究極的なものでないと除去してしまう。こういう人間もまた愚かな人であり仏法を毒害する賊である。以上。」

(四) 田中校注記載の注 (Cf. 田中 (一九七二) 四六頁注)

「迦葉經 大宝積經の八八巻・八九巻の摩訶迦葉會。沙門の賊のことが見えている (正蔵一一一五〇二a)

(五) 教証の原拠と現代語訳 (サンクリット語原典、チベット語訳、漢訳の順)

引用される『大宝積經』所収の〈迦葉經〉については、一本のチベット語訳と一本の漢訳が知られている(後述)。「摧邪輪」に挙がるこの經典名は、漢訳名の「摩訶迦葉會(摩訶迦葉經二卷)」に拠る。ちなみにチベット語訳名が、「Tib. *Phugs pa byams pa'i seng ge'i sgra chen po zhes bya theg pa chen po'i mdo* (聖なる弥勒の大獅子吼といわれる大乘經典)」といわれるように、この藏漢二本の訳經名は大きく異なる。經典名のみから早計すると別經典であるとの誤解が生じよう。前者は「迦葉(カーシャパ)」、そして後者は「弥勒(マイトレーヤ)」を強調した名前であるが、この点については、先ずは經典中における対告衆の変化に注意したい。漢訳では冒頭から上巻半までが

「迦葉」(Cf. 『大正蔵』十二 No. 三二〇—三三、五〇一頁中段—五〇三頁下段)、そこから上巻末までが「弥勒」(Cf. 五〇三頁下段—五〇七頁中段)であり、下巻は一貫して「迦葉」である(Cf. 五〇七頁中段—五一四頁中段)。〈迦葉經〉漢訳の全容が理解できる訓読(Cf. 長井真琴訳「国訳一切經」)を参照して、この問題について把握を試みたが、十分な理解には至らなかった。チベット語訳からの理解を含めて、今後の課題としたい。

・サンスクリット語原典 = **Arya-maitreyanahāsīṃhanāda-nṛma-mūhāyana-sūtra* (チベット語訳に基づく表記)

・チベット語訳 = 北京版 : Tr. Jinamitra, Surendrabodhi, Prajñāvarma, Ye shes sde, *Phugs pa byams pa'i seng ge'i sgra chen po zhes bya theg pa chen po'i mdo* (聖なる弥勒の大獅子吼といわれる大乘經典. 大谷 No. 七六〇—一二三) Zi. 六一—二四行—六二—二一行) デルダ版 : 同上 (東北 No. 六七) Ca. 卅〇—四行—七一—二二行)

「bdag gis de bzhin gshegs pa'i bstan pa la rab tu byung nas dge sbyong gi chom rkun mi bya'o zhes bslab par bya'o / 'Od srung de la dge sbyong gi chom rkun gang zhe na / bzhi po 'di dag ni dge sbyong gi chom rkun yin te / bzhi gang zhe na / 'Od srung 'di la dge slong dge sbyong gi kha dog dang / rtags dang / dbyibs la gnas shing de yang tshul khriṃs 'chal ba dang / sdig pa'i chos can yin par gyur na / de ni dge sbyong gi chom rkun dang po yin no / dben pa'i gnas su song ste / gnas pa na ni dge ba'i rnam par rtag pa dag la rnam par rtag par byed na // de ni dge sbyong gi chom rkun

gnyis pa yin no // bdag nyid 'bras bu ma thob cing so so i(D.so) skye
bo yin par shes bzhin du / rnyed pa dang bkur sti dang / tshig su
bead pa 'dod pas / zil kyis non pas / gzhan dag gi mdun du bdag
nyid dgra bcom pa yin bar khas 'che bar byed na / de ni dge sbyong
gi chom rkun gsum pa yin no // bdag la stod cing gzhan la smod
par byed na / de na(D.ni) dge sbyong gi chom rkun bzhi pa yin te /」

(試訳：「自分は如来の教えにおいて出家してから、沙門の賊になるべきではない」と学ぶべきである。カーシャパよ、そのうち

「沙門の賊」は何かといえば、これら四つが「沙門の賊」である。

「四」は何かといえば、カーシャパよ、これには比丘が沙門の色 (kha dog) と印 (rtags) と形 (dbyibs) とに住し、そうであつても破戒し、罪惡の法を有する者であつたならば、彼は第一

の「沙門の賊」である。閑寂な場所 (寺院) に行つて住する時に、

諸々の不善の分別 (三毒など) について分別するならば、彼は第二の「沙門の賊」である。自分自身は果を得ていない、凡夫である

と知りながら、利得と恭敬と名声への欲望に压倒されることにより、他者たちの面前において「自分自身は阿羅漢である」と自称するならば、彼は第三の「沙門の賊」である。自分を讃歎して、

他者を非難するならば、彼は第四の「沙門の賊」である。」

・漢訳 元魏月婆首那訳『大宝積經』「摩訶迦葉會 (摩訶迦葉經二卷)」(『大正藏』十一、No. 三二〇—三三、五〇二頁上段)

「莫於仏法作沙門賊。迦葉。如何名沙門賊。沙門賊有四種。何等為四。迦葉。若有比丘整理法服、似像比丘而破禁戒作不善法。是名第一沙門

之賊。二者於日暮後、其心思惟不善之法。是名第二沙門之賊。三者未得聖果、自知凡夫、為利養故、自称我得阿羅漢果。是名第三沙門之賊。四者自讚毀他。是名第四沙門之賊。迦葉。是名四種沙門之賊。」

(試訳：「仏法において〔出家してから〕沙門の賊となつてはならない。カーシャパよ、どうして「沙門の賊」といわれるのか。

「沙門の賊」には四種類が有る。何が「四」か。カーシャパよ、比丘がいたとして、法衣を正し整え、姿は比丘の如くであるが、

禁戒を破り、不善法を行ったとする。これを第一の「沙門の賊」という。二は、日が暮れた後に、心が不善の法を思う。これを第

二の「沙門の賊」という。三は、まだ聖果を得ていない、自身は凡夫であるとして、利得のために、「自分は阿羅漢果を得

た」と自称する。これを第三の「沙門の賊」という。四は、自分を讃歎して、他者を非難する。これを第四の「沙門の賊」という。

カーシャパよ、これを四種類の「沙門の賊」という。)

(六) 他典籍における同引用

○唐道世撰『法苑珠林』(『大正藏』五三、No. 二二二、九四八頁上段)

「又迦葉經云。仏告迦葉。於正法中得出家者。応作是念。十方世界現在諸仏悉知我心。莫於仏法作沙門賊。迦葉。云何名沙門賊。沙門賊有四種。何等為四。迦葉。若有比丘整理法服似像比丘。而破禁戒作不善法。是名第一沙門之賊。二者於日暮後。其心思惟不善之法。是名第二沙門之賊。三者未得聖果。自知凡夫。為利養故自称我得阿羅漢果。是名第三沙門之賊。四者自讚毀他。是名第四沙門之賊。」

(七) 補説

参考までに、同じ『大宝積經』に所収され、經典名が極めて類似する〈迦葉品〉の用例に触れたい(『大宝積經』内での名称は「普明菩薩会」⁹⁰)。この〈迦葉品〉の説示の特徴は、一つの話題について四項目が挙げられる点にある。『摧邪輪』が引用する〈迦葉經〉も先の例のごとく、説示方法がこの〈迦葉品〉と極めて類似している。例えば「声聞」に関しては、「声聞之人有四惡欲」を挙げて、「一者求見未來世仏。二者求作轉輪聖王。三者願生刹利大姓。四者願生婆羅門大姓。」(Cf. 五〇二頁下段)と述べたり、「声聞之人有四種性」を挙げて、「一者著我。二者著人。三者犯戒。四者求未來仏法」(Cf. 五〇二頁下段)と述べたり、「四種相似沙門」を挙げて、「一者惡戒。二者我見。三者誹謗正法。四者斷見」(Cf. 五〇二頁下段)を挙げるごとくである。今後の考察が必要ではあるが、經典名の類似といい、説示方法の類似といい、所説内容の類似といい、両經典には何らかの關係が推測できる。異訳とまではいえないが、〈迦葉品〉からの影響を承けた可能性を、問題の提起としておきたい。さてここでは、〈迦葉品〉に見られる〈迦葉經〉と類似する用例、すなわち「四種沙門」(形相相沙門、依義誑詐沙門、名聞沙門、真實行沙門)に関する梵本と藏訳との用例を挙げて、〈迦葉經〉当該箇所の内容補説とする。

・ **サンクリット語原典** Ⅱ 『大宝積經迦葉品梵藏漢六種合刊』(名著普及会、一七二頁、一九七七、覆刻版)

(Staël-Holstein, 'The Kāyapaṇiparivarta: A Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa Class edited in the original Sanskrit in Tibetan and in

Chinese, Shanghai' 一九二六)

「śramāa śramaṇa iti kāsapa ucyaṭe / kiyaṇ nu tāvat kāsapa śramaṇaḥ śramaṇa śramaṇa ity ucyaṭe / catvāra ime kāsapa śramaṇaḥ katame catvāraḥ yad uta varṇarūpalingasaṃsthānaśramaṇa / ācāraguṇtikuhakaśramaṇaḥ kirtisābdaslokaśramaṇaḥ bhūta-pratipattiśramaṇaḥ ime kāsapa catvārā śramaṇāḥ」

・ **梵文和訳** Ⅱ 長尾雅人、櫻部建訳「迦葉品(カーシャパの章)」(『宝積部經典』(大乘仏典)九、中央公論社、八九頁、一九八〇)

「九 惡しき沙門と眞正の沙門

(121) カーシャパよ、沙門、沙門ということがいわれる。カーシャパよ、どれだけのものが沙門、沙門と呼ばれるのであろうか。カーシャパよ、沙門にはつぎの四種類がある。いかなる四種類か。すなわち、(一) 外見上の色や姿形だけの沙門、(二) 行儀を正しくまもつて人をあざむく沙門、(三) 名譽や名声や賞讃(を追求するところ)の沙門、(四) 眞実に修行している沙門。 — カーシャパよ、沙門とはこの四種類である。⁹¹」

・ **チベット語訳** Ⅱ 北京版 : Tr. Jinamitra 'Silendrabodhi, Ye shes sde, 'Plugs pa 'od srung gi le'u zhes bya theg pa chen po'i mdo (大谷 No. 七六〇—四三三' Hi, 一二七—二行—四行)'、ブルグ版 : 同上(東北 No. 八七' Cha. 一四三—一行—二行)'、『大宝積經迦葉品梵藏漢六種合刊』(名著普及会、一七二頁、一九七七、覆刻版)

「'Od srung dge sbyong zhes bya ba ji tsam gyis na dge sbyong dge sbyong zhes bya zhe na / 'Od srung bzhiṅ po 'di dag ni dge sbyong

ste / bzhi gang zhe na / kha dog dang rtags kyi sbyibs kyi dge
sbyong dang / cho ga srung zhing tshul 'chos pa'i dge sbyong dang /
briod pa'i sgra tshigs su bcad pa'i dge sbyong dang / yang dag par
sgrub pa'i dge sbyong ngo /」

(試訳・カーシャパよ、沙門とはどれほどのことによつて、沙門、
沙門といわれるのかと問えば、カーシャパよ、これら四つが沙門
である。「四」とは何かと問えば、(一)色と印の形の沙門(《迦
葉経》では、色と印と形の沙門)と、(二)儀軌を護りつつ欺く
沙門と、(三)称賛、名声の沙門と、(四)真実に成就する沙門で
ある。)

なお、この《迦葉品》には漢訳された注釈が現存する。後魏菩提流
支訳『大宝積経論』(『大正蔵』二六、No. 一五二三)である。これに
関する研究として、大竹晋校注『大宝積経論』(『新国訳大蔵経』釈経
論部十五、大蔵出版、二〇〇八)がある。大変詳細で有益な研究であ
る。本稿で扱った「四種沙門」の当該箇所は三〇五頁以下、すなわち
「形福相沙門」(ibid., 三〇六頁～三〇八頁)、「依義誑詐沙門」(ibid.,
三〇八頁～三〇九頁)、「名聞沙門」(ibid., 三一〇頁)、「真实行沙門
(ibid., 三一〇頁～三一四頁)である。

ここに出る「名聞沙門(名利沙門)」という形で批判アプローチ
は、念仏者に対するものとしては、道元(一二〇〇—一二五三)の
『弁道話』(第三問答)にも確認できる。⁽⁹⁾

「又説経・念仏等のつとめにうるところの功德を、なんぢしるや
いなや。たゞしたおうごかし、⁽¹⁰⁾こゑおあぐる仏事功德とおもえる、

明恵『摧邪輪』の引用経論に関する小考(一)(中御門敬教)

いとはかなし。仏法に擬するにうたゝとおく、いよ／＼はるかな
り。又、経書をひらくことは、ほとけ頓漸修行の儀則をおしへお
けると、あきらめしり、教のごとく修行すれば、かならず証をと
らしめむとなり。いたづらに思量念度をつるやして、菩提をうる
功德に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千万誦の口業をしきり
にして仏道にいたらむとするは、なおこれながえおきたにして、
越にむかはむとおもはんがごとし。また、円孔に方木をいれんと
せんとおなじ。文をみながら修するみちにくらき、それ医方をも
る人の合薬をわすれん、なにの益かあらん。口声をひまなくせる、
春の田のかへるの、昼夜になくがごとし、つゐに又益なし。いは
むやふかく名利にまどはさるゝやから、これらのことおすてがた
し。それ利貧のこゝろはなだふかきゆゑに、むかしすでにありき、
いまのよになからむや。もともあはれむべし。」
斎藤蒙光氏の指摘によると、法然典籍にも「往生」の前提となる
仏教的課題、すなわち「今生の利己的な生き様への反省を促す」際
に、「名聞利養」が議論されるという(唐法蔵撰『梵網経菩薩戒本疏』
の「福行」に相当)。外面的ではなく内面的な意味での「真の出家者」
への議論が起こつていたようである。⁽¹¹⁾

註

(1)「香象大師の梵網経の疏」の原拠は以下のごとくである。

○唐法蔵撰『梵網経菩薩戒本疏』(『大正蔵』四〇、No. 一八一三、六
二八頁下段～六二九頁上段)

「四約難行者亦有二類。一約福行者。謂性非質直苟姦計共崇奇福。

眩耀世人招引重囑。意在以少呼多。用此活命。既逐其所求即恃此
 起慢。陵蔑余人無利養者。悉以苟非。利養既爾。名聞亦然。此是
 賣仏法賊。出迦葉經。二約余行者。謂性非慧悟。隨學一法即便對
 著眩此所學以招名利。撥余所修皆非究竟。此亦愚人蠱害仏法賊也。
 此上略舉四位。理實通一切行皆有誑偽。並應准簡。勸諸後學勿令
 自心墜中。即其寶積寶梁迦葉仏藏等經請誑在心府。養菩提心方可
 為要耳。」

ちなみに『梵網經菩薩戒本疏』は、「沙門賊」を説く「迦葉經」の
 經名を、もう一箇所出す。以下のとおりである。

○唐法藏撰『梵網經菩薩戒本疏』（『大正藏』四〇、No. 一八一三、六
 二八頁下段）

「六約行者。仏法内人多約四位起行。謂三學及雜行。初約戒學者
 有二類。一矯異。謂雖不破戒性非質直。依邪思計現異威儀。眩耀
 世間以求名利。本無淨心以求出離。然普抑余人無異威儀者悉為無
 德。此是沙門賊亦是威儀賊也。如迦葉經寶積經等説。」

これを原拠としたものに以下の二典籍がある。

○宋子璿錄『起心論疏筆削記』（『大正藏』四四、No. 一八四八、三九九
 頁上段～中段）

「菩薩戒疏云。仏法内人多約四位起行。謂三學及雜行。初約戒學
 者。有二類。一矯異者。謂雖不破戒性非質直。依邪思計現異威儀
 眩耀世間以求名利。本無片心以求出離。然普抑余人無異威儀者。
 悉為無德。此是沙門賊亦是威儀賊也。如迦葉寶積等經説。」

○『起心論疏記會閱』（『已統藏』四五、No. 七六八、七一四頁上段）

「菩薩戒疏云。仏法内人。多約四位起行。謂三學及雜行。初約戒
 學者。有二類。一。矯異者。謂雖不破戒性非質直。依邪思計。現
 異威儀。眩耀世間以求名利。本無片心以求出離。然普抑余人無異
 威儀者。悉為無德。此是沙門賊。亦是威儀賊也。如迦葉寶積等經
 説。」

なお、鎌田茂雄全訳註『八宗綱要』（講談社学術文庫、二〇〇六、
 三六五頁～三六六頁）を利用して、「香象大師」を探ると以下のごと
 し。

「○香象大師―法藏（六四三―七一二）のこと。先祖が康居国の
 出身で姓は康氏、康蔵と呼ばれたので、類字によって香象の名が
 ある。智儼が長安雲華寺において『華嚴經』を講義するのを聴き
 門下に投じた。則天武后の帰依を受け、長安四年（七〇四）武后
 のために長生殿で十玄六相の教義を講じた。著書には『華嚴經深
 玄記』、『華嚴五教章』、『華嚴經伝記』、『起信論義記』など多数あ
 る。弟子には静法寺慧苑、文超等数人がいる。」

(2) 「摩訶迦葉会第二十三之一」（『大正藏』十一、No. 三二〇―三三、
 五〇一頁中段～五〇七頁中段）と「摩訶迦葉会第二十三之二」（『大正
 藏』十一、No. 三二〇―三三、五〇七頁中段～五一四頁中段）を指し
 て、「摩訶迦葉經二卷」と呼んでいる。

(3) これと似たような現象が同じ『大宝積經』に所収される失訳「普明
 菩薩会」（『大正藏』十一、No. 三二〇―四三）にも起こっている。サ
 ンスクリット語原典名は *Kṛtāpāṇīyā* (= Tib. *Phugs pa 'Od
 srung gi le'u zhes bya thug pa chen po'i mdo*)、すなわち「迦葉所問
 經」である。漢訳の異訳名を確認すると、後漢支婁迦讖訳『仏説遺日
 摩尼宝經』（Cf. 『大正藏』十二、No. 三五〇）、失訳『仏説摩訶衍宝
 藏經』（Cf. 『大正藏』十二、No. 三五二）、宋施護訳『仏説大迦葉問
 大宝積正法經』（Cf. 『大正藏』十二、No. 三五二）、梁曼陀羅仙共僧
 伽婆羅訳『大乘宝雲經』（『大正藏』十六、No. 六五九）、宋沮京声訳
 『仏説迦葉禁戒經』（『大正藏』二四、No. 一四六九）である。
 (4) 僧侶の姿について述べている。通常は袈裟と鉢を指す。
 (5) 例えば、「Eng. live a life (人生を生きる)」のような再帰的な用法。
 (6) 〈迦葉品〉の漢訳には以下が知られている。

○後漢支婁迦讖訳『仏説遺日摩尼宝經』（『大正藏』十二、No. 三五〇）

○梁曼陀羅仙共僧伽婆羅識『大乘宝雲經』(『大正藏』十六、No. 六五九)
○失訳『仏説摩訶衍宝嚴經』(『大正藏』十二、No. 三五一)

○失訳『大宝積經』「普明菩薩會」(『大正藏』十一、No. 三二〇—四三)

○宋施護訳『仏説大迦葉問大宝積正法經』(『大正藏』十二、No. 三五一)

○宋沮京声訳『仏説迦葉禁戒經』(『大正藏』二四、No. 一四六九)

ドイツ語訳として、Friedrich Weller, *Zum Kacyapaparivata*, Berlin, 一九六五(未見)、『*Mitteilungen des Instituts für Orientalischungen*』Ⅻ・四、一九六六(未見)がある。このドイツ語訳に関する情報は、前掲の長尾、櫻部(一九八〇)「凡例」から得た。〈迦葉品〉を含む、〈大宝積經〉の解題については、松田和信、浅野守信「四 宝積部」(勝崎裕彦、小峰弥彦、下田正弘、渡辺章悟編著『大乘經典解説辞典』、一五一頁—一七〇頁、北辰堂、一九九七)を参照のこと。

(7) この長尾、櫻部訳の底本は上記のホルシュタイン本である。

- (8) 〈迦葉品〉(124)には、「名利沙門」の特徴をまとめて、「長尾、櫻部訳」このような(さまざま)思慮・計算のもとに、無欲となり、足ることを知り、ひとり離れて修行する。」とある(*ibid.*, p. 91)。原文のサンスクリット語は、'Sit.pratisaṅkhyāya alpechah saṃtuṣṭaḥ pravikto viharati' である(*ibid.*, p. 175)。「名利沙門」の核にある「思慮・計算(Skt. pratisaṅkhyā)とは、伝統的な仏教用語(真諦訳、玄奘訳)では「択」「簡択」に相当する。〈俱舍論〉五位七十五法の中の、「択滅(pratisaṅkhyānirodha)」(AK.i.6ab)の項目には、「本庄訳：苦聖諦等を各々辨別することが擇であつて、慧(No. 18)の一種である」とある(Cf. 本庄良文『俱舍論』七十五法定義集)。「三康文化研究所年報」二六・二七号、二八頁、一九九五)。
- (9) 寺田透、水野弥穂子『道元 上』(「日本思想体系」十二、岩波書店、十六頁から十七頁、一九七〇)
- (10) 『勅伝』第二十三卷(Cf. 『元祖大師御法語』前篇第二七「親縁」)

「さは候えども、常に御舌のはたらくべきにて候うなり。三業相応のために候うべし。三業とは、身と口と意とを申し候うなり。しかも仏の本願の称名なるが故に、声を本体とは思し食すべきにて候。」

- (11) 平成二十七年十一月二十六日、平成二十七年東海学園大学共生文化研究所第一回定例研究会にて、斎藤蒙光氏は題目「共生」と法然浄土教―「ともいき」と「往生」を発表された。その際のレジュメの中に、「往生大要抄」至誠心釈、「十二箇条の問答」第三問答、「要義問答」第一問答、「一期物語」天台座主・顕真の言葉、に出る「名聞利養」の用例を掲載された。

(なかみかど けいきょう 嘱託研究員、
知恩院浄土宗学研究所研究員)